第 7 回 「緑化協力活動の現場で見る、中国の環境問題」

日時：6 月 29 日（水）　午後 7 時～午後 8 時 30 分
会場：龍谷大学　大阪梅田キャンパス　研修室
講師：高見　邦雄
　　続・黄土高原レポート URL　http://blog.goo.ne.jp/takamik316
所属：認定特定非営利活動法人　緑の地球ネットワーク　事務局長
　　URL　http://homepage3.nifty.com/gentree/

認定特定非営利活動法人緑の地球ネットワーク（以下、GEN）で事務局長を務める高見邦雄さんは、中国で草の根環境協力を継続しています。94 年からは事務局長として毎年 100～120 日の間、黄土高原の農村に滞在して緑化活動に従事してきました。その功績が認められ、2001 年には中国政府から国家友誼奨（賞）、2006 年には中国大同市から大同市栄誉市民の称号を授与されました。著書『ぼくらの村にアンズが実った』（日本経済新聞社）は、中国と韓国で訳書が出版されています。

講座概要

世界第 2 位の経済規模になった中国ですが、首都北京から 300 キロメートル西に位置する大同では砂漠化が進み、経済成長の背後で環境がひどく傷ついています。今や地球の環境に大きな影響を与える中国の環境や水の問題を、現地の実情に基づいて率直にお話しいただきました。

GEN が活動を行う黄土高原、大同という土地

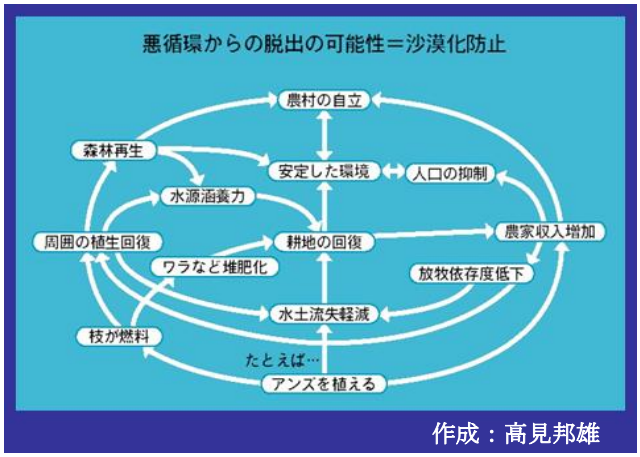
GEN が 20 年にわたって活動している大同は、広さ 54 万平方キロメートル（日本の国土 1.4 倍）の黄土高原の東北の端にあります。大同の中央部を西から東に流れる桑干河は、洋河などと合流して永定河と名を変えますが、それをせき止めている官庁ダムは、密雲ダムと並んで北京の大切な水源です。また、太行山脈、大馬群山脈、燕山山脈の切れ目が桑干河の流域であり、ここが風砂の吹き出し口（風口）になっています。

大同の農村の生活は、「靠着山呀，没柴烧．十箇年頭，九年旱，一年澇.」（山は近くにあるけれど、煮炊きに使う柴はなし。十の年を重ねれば、九年は旱（ひでり）で、一年は大水。大同市陽高県の農村の民謡『高山高』より）という厳しいものです。丘陵や山の急斜面まで畑が耕されており、目の届くかぎりの段々畑ですが、それは“農民の奮闘”の歴史であり、“自然の大破壊”でもあります。年間降水量は平均 400 ミリですが、年ごとの変動が激しく、多い年は 650 ミリ、少ない年は 200 ミリ台になります。季節的な偏りも極端で、年間降水量の 3 分の 2 が 6 月後半から 8 月末に集中し、雨がほしい春の種まきの時期には降りません。夏の雨は狭い範囲にごく短時間のゲリラ豪雨になり、1 時間に 70 ミリを超すこともしばしばです。植生の乏しいところにこのような雨がふると、水土流失（土壌の浸食）が発生し、土地が劣化して、作物や植物が育たなくなります。これが砂漠化*で、黄土高原では雨が砂漠化を加速する皮肉な現象が起こっています。

*　乾燥地域、半乾燥地域、乾燥半湿潤地域における気候上の変動や人間活動を含む様々な要素に起因する土地の劣化（アジェンダ 21・砂漠化対処条約における定義より）

GEN の緑化協力活動

緑化活動を始めた当初、「砂漠化には植林」という図式が念頭にありました。しかし、現地で緑化活動に関わるうちに、そのような単純な問題ではないと考えるようになります。黄土高原が砂漠化する原因は、水土流失を軸とする「環境破壊と貧困の悪循環」であり、この悪循環を逆転させるか、断ち切る以外に解決はないと思うようになったのです。



高所にある貧しい村ほど水と土の条件が悪く、生産性が低いので、耕地を広げるしかありません。そのために森林や草地が壊されました。ヒツジ、ヤギなどを放牧するため、さらに植生が貧弱化します。貧しい農村ほど子どもが多いのは、耕作や水汲みなどに男手が必要とされ、男の子が生まれるまで子どもを産み続けようとするからです。

GEN は農村の小学校に付属果樹園を造り、アンズなどを植え、そこからの収入の一部を教育支援に使うことにしました。果樹の剪定枝が燃料として利用できるようになると、周囲の山に樹木が戻ります。それまで燃やされていたトウモロコシの茎やアワ、キビ等の藁が堆肥として畑に戻されることになり、畑の土が肥えていきます。ゆるやかですが、良性の循環がはじまるわけです。さらに専門家の協力を得て、植林技術の改善や人材育成などソフト面の協力を強化してきました。自然植物園などの緑化拠点はそのために役立っています。また、ボランティアツアー参加者と現地の人が植栽したモンゴリマツは、10 年後には 3 メートルを超えるまでに成長しました。

【参考】JICA（独立行政法人国際協力機構）のウェブサイトから GEN の黄土高原での活動内容がご覧いただけます。
「国別事業一覧/中華人民共和国/草の根協力技術協力」　URL　http://www.jica.go.jp/partner/kusanone/country/china.html

中国の南水北調政策と発展する経済

農村での井戸掘りを応援したのを機会に、水に関する調査を実施したところ（2000 年：7 県 21 村、計 900 人）、1 世帯 1 日あたりの水使用量は平均 23.8 リッターでした。最少の村は 15.6 リッターです。そして、もともと水に困っている村ほど、水が減っているという回答が目立ちます。

水問題の深刻さは農村部に限ったことではありません。北京や天津といった大都市でも深刻な状況になっています。北京の水源である官庁ダムは、前世紀末から急速に水位が下がり、官庁ダムに注ぐ直前の永定河は河底がトウモロコシ畑に変わり、流れはわずかしかありません。中国政府は、比較的に水の多い長江流域の水を北京、天津へ運ぶ南水北調を計画し、東ルートと中ルートが工事中です。その完成を待たないで、太行山脈のふもとの河北省の 4 つのダムの水を 2008 年 9 月から北京に引きました。

植物調査のために太行山を歩くと、重機の音を聞かない日はありません。鉱山用の大型ダンプもよくみます。鉄鉱石などの採掘が進み、その残土が谷に投げ捨てられています。水汚染がすすむわけですが、そこを水源とするダムの水が北京に送られているわけです。

自然に合わせて人間が生きていく形を考える

南水北調が成功したとしても、賄えるのは都市の生活用水と工業用水までででしょう。農業用水までは回りません。食糧生産のためにすでに大量の地下水が使われ、華北の穀倉地帯で地下水位が急低下しています。農産物も木材も水の固まりです。水不足の深刻な中国でつくられた農作物が日本に輸入されていますが、このようなことが未来永劫つづくことはありません。日本が恵まれている資源といえば、水でしょう。それを有効に使うことをもっと真剣に考える必要があると思います。